

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集 ACCUプロダクトMAP2

UNESCOとの連携.....6

国際交流の意義：「出会い」と「対話」で育む平和の文化.....7

活動メモ.....11

ACCU INFORMATION.....11

No. **416**
2022年10月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

ACCUプロダクトMAP

ACCUの VISION MISSION

ACCUは、ユネスコの打診を受け1971年に日本政府と出版界等民間の協力により設立されました。以来、ユネスコの「平和は、人類の英知と精神的な連携の上に築かれるものである」という理念の下、ユネスコをはじめとする国際機関、ユネスコ加盟国、政府教育機関、産業界、地域社会と協力し、アジア太平洋地域の教育と文化の相互交流等を通して、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献する活動を行っています。



事業紹介

教育・文化の分野でACCUが推進してきた事業を分かりやすく紹介すべく、機関紙『ACCU news』や各事業パンフレット等を制作しています。一例では「教職員国際交流事業」の取組や目的について事業未参加の方にもご理解いただけるよう、また、「先生が変わる、子どもが変わる、学校が変わる、学びの場」である教職員の交流がもたらす先生お一人お一人の変容と広がりを感じられるよう、パンフレットと共に映像も制作しました。

ACCU news



413号



リサーチ

ACCUでは近年、ESDに取り組む全国各地の学校教員及び有識者の方々の参画を得て、SDGs時代の教育の在り方や、カリキュラム・教材開発と評価手法開発に関わる研究プロジェクトを数多く展開してきました。学びの主体である子どもたち、そして教員や学校の「変容」と「エンパワメント」に主眼を置き、事業参画者の豊富な実践知を改めて整理し、さらに教材や実践ガイドという形で広く普及させることに努めています。



レポート

事業の詳細や実績等を記録・蓄積するためレポートを作成し、印刷物及びACCUホームページへの掲載という形で広く知見を還元しています。必要に応じ、事業参加者や協力校、教育委員会等にも配布し、振り返りや学びの波及にご活用いただくことに注力しています。なお、2020年度「教職員国際交流事業」では、大学教授や統計分析の専門家、行政職員を交え事業成果を「見える化」し、事業のあり方、意義や重要性を探りました。



デジタル
コンテンツ

事業情報や事例紹介資料、交流用プラットフォーム等を電子媒体で作成しています。ACCUの活動への参加募集や制作物等ACCUの活動全般を発信する「ACCUホームページ (HP)」、ユネスコスクール関連情報を発信する「ユネスコスクール公式ウェブサイト」、教職員国際交流事業に参加した各国教職員のための交流SNS「TREE」など、いつでもどこからでも気軽にアクセスして情報が得られ、互いにつながることができるコンテンツを目指しています。



ACCU HP

ACCUは設立以来、教育協力及び文化協力、人材育成、相互交流等の分野で多くの事業を推進してきました。事業実施に向けて調査・研究・収集した情報や、事業を通して開発されたノウハウ、ご協力いただいた専門家の知見等は、広くご活用いただけるよう「成果物」としてまとめ、公開しています。本特集では、近年制作したものを例に、ACCUの活動を特徴づけるテーマで分類し、ご紹介します。

Check!

ここに掲載した成果物は、ホームページで詳しく紹介しています。

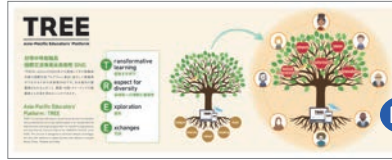


414号

415号



SMILE Asia プロジェクトパンフレット



(2020年度)

教職員国際交流事業パンフレット



(2021年度)



教職員国際交流事業 紹介動画
※タイ語、韓国語、中国語版も制作



変容につながる16のアプローチ
-SDGsを活かした学校教員の取組-



(2019年度)



変容を捉え、変容につながる評価のカタチ
-SDGs時代を生きる学校教員の知恵-

(2020年度)



変容を捉え、変容につながる評価のモデル
-SDGs時代を生きる学校教員からの提案-



(2021年度)



教職員国際交流事業報告書
(2017~2021年度)



教職員国際交流の価値とインパクト
成果分析報告書・実施報告書(2020年度)



ACCUホームページ「活動レポート」



ユネスコスクール公式ウェブサイト



EN



(島根県隠岐)



(岡山県水島)

「持続可能な地域づくりを推進する
学びの共同体構築支援事業」で制作した
事例概要映像(2021年度)

ACCUの Core Value

「アジアの子どもに良質な本や教材を届けたい」—この思いを胸に、ACCUでは、各国の編集者等専門家による「共同事業方式」での書籍開発が進められました。国内外の知見で築かれた本方式は、各国が平等な立場で構想・企画を行い、各国専門家から材料等が提供されるというもので、その過程で互いの文化を知ることにつながりました。本方式から生じた効果＝「共有意識」「実情反映」「文化の相互理解」は、“ACCUのCore Value”として今も「地域性を大切に」「協働する」「互いの文化を理解し尊重する」姿勢に生かされています。



近年、世界的にESDが推進され、国内の全学校でも取り組むことが前提となる中、ACCUが提供するESD関連のプロジェクトや教材は、ますます重要な意義を持つようになりました。ESDは学ぶことだけでなく、実行し体感することによって、子どもも大人も大きく変容することができます。ACCUのESD推進事業への参加を通じて、学校の違いを越えた学びの探究が行われ、従来の教育観を超越したアイデアが多数生まれています。



国際機関・産官学民の組織等とACCUが協働し、「若者」や「学びの共同体」等のキーワードで地域づくりに関する多彩なプロジェクトを展開しています。その中で、国境を越えた対話を通じて各国・地域で抱える課題や困難を共有し、持続可能な地域の実現に向けた学び合いを深めることができました。今後も、国内外でネットワークを構築しながらESDの実践を通じた地域づくりを推進し、本活動に関する情報発信も行っていきます。



長年ACCUは国内外で交流事業を実施しており、そのうちの1つ「教職員国際交流事業」は、参加者の年代も地域も専門性も実に多様です。コロナ禍で海外渡航が困難となった2020年度以降は、顔を合わせて対話する機会が減少したことから、先生方の声を通してプログラムを紹介する冊子制作にも力を入れています。プログラム参加のきっかけやオン・オフライン交流から得たもの等、国内外の先生様の様々なストーリーを紹介しています。



ACCUでは、ユネスコや大学をはじめとする他機関との制作物の共同発行や、内容へのフィードバック、翻訳等を含む他機関刊行物への協力も行っています。ここには、長年のACCUの教育協力分野やESD推進に係る事業の知見とネットワークが活かされています。なお、各発行物は、紙媒体や関係機関ホームページで公開されています。ACCUメールマガジンやACCU HP等でも随時発信していますので、是非ご活用ください。



持続可能な
開発目標のための教育
-学習目標-(2020年度)

【共に学び、通じ合う —ACCUの活動成果を振り返って—】

今回初めて、私たちの事業を通して生まれたものを“プロダクトMAP”という形でまとめてみました。紙・デジタル・白黒・カラー・図表・挿絵等、様々な媒体や様式を用いていますが、これらが形になっていく過程では、実に多くの教育現場の先生方や専



Vol.1
Vol.2
Vol.3
キラリ発進! サステイナブルスクール
—ホールスクールアプローチで描く未来の学校—
(2016~2018年度)



(2021年度)
【ESD推進のための動画集】
How to Promote ESD —ESDの取り組み方— vol.1
学び方・指導方法 探究学習のプロセスで学ぶ



EN
Learning Step
(学習ステップ)
(2016年度)



EN
YOUTH CHANGES THE WORLD
～若者主体の持続可能な
地域づくりの記録(2018年度)



EN
アジア4か国における持続可能な
地域づくり事例集(2020年度)



EN
共に学び、地域をつくる
～実践者が描く協働の姿(2021年度)



EN
学びと協働による持続可能な
地域づくり(2021年度)



(2020年度)
TREE of International Exchange
—国際交流の木のうで—



(2021年度)
TREE of International Exchange
—先生たちのための国際交流のとびら—

グローバルエデュケーションモニタリングレポート 日本語版サマリー



平和に向かって共に：
サイレントマンガカタログ
先生の手引き(2021年度)



和食文化継承のための
小学生向け教材
“わたしたちと「和食」”
(2021年度)

門家の皆様にご協力いただきました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。さて、お気づきになられた方もいらっしゃるかもしれませんが、ACCUの各事業には共通するいくつかのキーワードがあります。「学び合い」、「学びの波及」、「変容」、「違い

を越えた学びの探究」、「共同」、「協働」—こうした言葉からも分かるように、ACCUでは双方向の学び、それぞれがもつ異なる背景、経験、価値観を大切にしています。これからも皆様と“キャッチボール”をしながら、活動を充実させてまいります。

UNESCOとの連携

ACCUでは、アジア太平洋地域の学校教育におけるESD推進のためのプロジェクトや、公民館及びCLCでの持続可能な地域づくりのためのプロジェクトなど、学校やコミュニティでのESD・SDGs推進に取り組んできました。今回は、ユネスコ東アジア地域事務所である北京事務所と、アジア・太平洋地域教育局であるバンコク事務所と連携し、その協力の下に実施した「ESD動画」の制作と、ASPnetアクションリサーチ事業についてご紹介します。

ESD実践のヒントとなる動画を制作しました！

北京事務所の協力の下、2021年度に『How to Promote ESD－ESDの取り組み方－ vol.1 学び方・指導方法 探究学習のプロセスで学ぶ』と題した動画を制作しました。本動画は各校の指導に役立ててもらうことを目的に、ESDの取り組み方について具体例を基に解説した動画集の第1弾として、全国小中学校環境教育

研究会の元会長 棚橋乾氏の監修、法政大学坂本旬ゼミの撮影協力を得て作られました。今後もESDの取り組み方をシリーズ化し、ESD推進のための多様なテーマについて解説する動画を公開していく予定です。ぜひ様々な場面でのご指導にご活用ください(英語字幕あり)。

How to Promote ESD



※動画はこちらからご覧ください → 

SDGs達成へ向けたASPnet共同研究プロジェクト

バンコク事務所による「ASPnetアクションリサーチ事業」は、ESDに焦点を当て、学習指導・学習向上のために学校と教員を支援することを目的に、2020年より日本、タイ、ベトナムの3か国のユネスコスクールから中学校が参加し、アクションリサーチを中心に実施されました。日本からは気仙沼市立階上中学校、大田区立大森第六中学校、岡山大学教育学部附属中学校の3校が参加し、ACCUは国内での調整業務を担当しました。



第2回国内ワークショップの様子

アクションリサーチの過程では、参加国の生徒が提案したテーマを基に生徒同士のオンライン交流会が実施され、国内の生徒たちは海外の参加生徒に伝わるよう一生懸命に英語で発表し、質疑応答に臨んでいました。

事業最終年度となった今年度は、対面での会合を全2回開催しました。7月15日、16日に岡山市で開催した第2回国内ワークショップでは、これまでのアクションリサーチを通して見えてきた成果や課題の共有と、意見交換を国内の参加教職員及びリサーチャーと共に実施しました。その後、本事業の最終成果報告会となる第2回地域会合を、ユネスコバンコク事務所主催、ACCUが国内の事務局として、9月5日～8日に東京で開催しました。会合には日本、タイ、ベトナムの教職員、教育省職員、研究者など約25名が参加しました。



第2回地域会合学校訪問の様子

プログラム内では、東京都内のユネスコスクール訪問も組み込まれ、海外からの参加者が、SDGsやESDに先進的に取り組む日本の学校を実際に見学し、日本の教職員や生徒と交流できたことでとても充実した時間となりました。

本事業は第2回地域会合をもって終了となりますが、今後も参加校の教職員や生徒が継続して交流していけるよう、ACCUは支援していきます。

国際交流の意義： 「出会い」と「対話」で育む平和の文化

ACCUは、未来を担う児童・生徒を育む「先生」を対象とした教職員国際交流を主幹事業の一つとして位置づけ長年実施しており、国際交流を通して多様性に触れることに価値を置いています。世界の多様性は、教室の中の多様性にもつながっているかもしれません。今回の対談では、ユネスコ教育、ESDや多様な学びを推進するオルタナティブ教育の第一人者である、吉田敦彦先生にお話を伺いました。



吉田 敦彦, PhD.

大阪公立大学
大学院現代システム科学研究科
教育福祉学類 教授

日本ユネスコ協会連盟理事、日本ホリスティック教育/ケア学会前会長、日本シュタイナー学校協会専門会員。専門は教育、人間形成論、教育哲学・教育人間学。



伊藤 妙恵

ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部
プログラム・スペシャリスト



進藤 由美

ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部 部長

国際交流はゴツゴツしたもの

伊藤：吉田先生が以前、「わざわざ他国間交流する意味って何だろう」と投げかけてくださった時、私はハッとしました。「国際交流ってゴツゴツしたものだね」「それは“違い”であって、自分の世界で生きるだけでは得られず、“異文化の他者”と出会うことで自分が揺さぶられ変わっていくということ」ともおっしゃった。御著書の『世界が変わる学び』では、「変容が生じる学びは、暗黙の前提としている既存の見方・考え方を意識的に捉え直し、その自明性が揺さぶられ、世界が違って見えるような新しい気づき・世界観や価値観の変容、それを通じた自己変容に誘われる深い学びである」と述べていらっしゃいます。ACCUの教職員国際交流事業は「先生が変わる、子どもが変わる、学校が変わる 学びの場」として20年以上続いていて、私自身は関わって5年くらいですが、「この事業の意味ってなんだろう」と悶々と考えながらやってきました。吉田先生のお言葉に寄せてみると、この事業が深い学びの機会を創出するものなんだと改めて認識できて、これまで捉えきれていなかったものの輪郭がくっきりし始めました。

吉田敦彦先生（以下、吉田先生）：いわゆる国際交流って、互いのことを分かり合い仲良くなって握手してハグして、つながり合いましたねっていうイメージがあるけど、それは表面的なもので、そこからもう一皮剥くって感じだね。あの「ゴツゴ

ツした」というところが伝わったならすごいなと思った。

進藤：交流事業は「出会い」と「対話」の場として捉えています。吉田先生はこの「出会い」という言葉を大切になさっておられます。出会わないと始まらない、他の世界に入れない、この「出会い」というシンプルな言葉がすごく大きな意味を持つんだということを以前教えていただきました。我々は皆、何かしらの共同体の一員としてつながっている。地域の中の学校であったり、一市民として、あるいは子どもであったり大人であったり…そのつながりは、それはそれで大切だけれど、その中に留まらず一度出てみる。地域から別の地域に、あるいは世界に出て「出会い」に直面してみる。そういったことを大事にサポートしていくのがこの事業だと思っています。

出会いは計画的に仕組めない

進藤：実は、事業のプログラムを企画するときに一番大変で、かつ楽しいんです。教職員国際交流事業では、韓国、中国、タイ、インドとの交流を企画・運営していますが、毎年プログラムの中身は汗をかいて、練りに練って“つくっていかないように”つくりまします。この「つくり込まないためにつくり込む」というプロセスが大変かつ楽しいのです。先生の御著書では“脱計画性の文化”という言葉があったと思うのですが。

吉田先生：それは、計画を放棄するというのではなくてね。

計画はするけど、それに縛られない。予測した計画が揺さぶられるような事態を、織り込む。

進藤：そうなんです。脱計画性を計画するために我々は非常に悩みながら、外部の専門家の意見も取り入れながら、参加される先生方に主体的に交流の場に入っていたいただけるようなプログラムづくりに注力しています。20年を振り返ると、海外の先生が日本へ、あるいは日本の先生が海外の教育現場を知る機会が少なかった当初は、視察や講義など受動的なプログラムが多かったと思います。今は、双方向の対話につながり、より深い学びをもたらすようなプログラムを目指しています。

吉田先生：面白いところでですね。毎年いろんな人が集まって、にこやかに話ができて、今まで知らなかったことを他国の文脈から学んで、それなりの成果が出る。でも、計画通りスムーズにいくと、なかなかそれ以上深まらない。国際交流ってもっとゴツゴツ、ハラハラ、ドキドキ。交流することで対立や誤解が生まれるリスクもあるはずで、でもそれを回避しようとするのではなく、そのときこそチャンスと捉える。「出会い」は予定できるものではなく、予測が外れるときに生まれる。想定外のものに出くわしてこそ、出会い。

自文化の外に出て、会う

吉田先生：自分と共通点を持つ人との間では「触れ合った」とか「仲良くなった」とは言えるけど、「出会った」とは言わないと思う。「出会い」という言葉は「あの出会いがあったから今の私がある」「あの出会いがなかったら違う人生を歩んでいたかもしれない」みたいなときに使いますよね。「出て、会う」の「出る」という言葉が付いている意味を強く捉えたいんです。共同性のある文化圏の人同士ではその文化を通して理解し合える。「共同」は同じところを共にすると書きますね。しかし、「出会い」とは、同じところを共にしない他者と会うこと。言葉を尽くさなくても以心伝心できるような仲間内の共同体から

「出て、外の世界の異質な他者に「会う」ということ。それが異文化交流・国際交流のゴツゴツした意義。それって、必ずしも心地良くはない、違和感を覚える機会ですよね。

僕は20年ぐらい毎年いろんな国へ学生たちとスタディツアーに行っていて、その前後で私は変わったと思える旅にしよう、そのためにはすぐに理解し合える



吉田 敦彦先生

仲間の枠から外へ「出ないといけない」と伝えています。異質なものと出会うからこそ自分が変わることができる。そこで本当にショックを受けて、自分が揺さぶられ、今まで生きてきた世界の狭さや別の生き方があっていいんだといったことを実感してほしい、と。毎回10人くらいで行きますが、仲間内ではあまり話さないようにしています。せっかく外の世界と出会っているのに、自分たちの枠組みで理解しちゃうから。行っている間には答えを見つけない。問いにさらされ、揺さぶられ、当たり前がそうではなかったことに気づき、戸惑いを抱えたまま帰ってくる、こういう経験を大切に。それが国際交流、異なる文化と接する体験をわざわざしにいく醍醐味だと思います。

理解し得ない他者との対話

吉田先生：理解し得ない他者と出会ったとき、相手を自分の理解の枠組みで理解しようとしなくていい。もちろん理解し得ないまま別れば、後味はすっきりしないし不安になると思う。でも、むしろ、理解し得ないから分かろうとする、だから「対話」するんだよね。

「対話」は、全部が分かることはないというのを前提に、互いにどこが理解し得ていないのかを確かめ合うこと。“分かり合えなさ”が分かると、本当に分かろうとして、対話が深まっていく。言ってみれば、理解できない他者と理解できないまま対話を続ける力を身に付けるために異文化交流をするんだと思います。

進藤：今伺っていて思いましたのは、異質な他者を理解しきることではできないけれど、対話を通して互いが異なるということを肌で、心で感じる。例えば、教職員国際交流事業に参加された先生がプログラムを終えて自分のホームグラウンドに戻って改めて子どもたちと接したときに、自分の価値観の中で子どもたちをカテゴライズしなくていい、この子はこうだからこうなんだと先生の主観で子どもを理解しようとしなくていいということにつながっていくと思います。上手く説明できませんが、子どもたち・学生たちは皆それぞれに違うし、同じ町や学区内という共同体の中にいるけれど、共同体の外、コンフォートゾーン（心地良い空間）を出て、様々な出会いをすることで他者理解が進み、またコンフォートゾーンに戻ってきたときに自分が変容していることに気づく。自分の理解し得る中で判断せず、一人一人の子どものある様を見ることができると思います。

異文化としての子ども

吉田先生：そうですね。子どもが、大人側の文化で囲い込んでしまえない異文化の他者、“異文化としての子ども”に見えてくるとしたら素晴らしい。根強い学校文化、教師文化というも

のがあるけれど、先生が自分の文化の外に出て異質な他者と出会い、自分たちの当たり前がそうではないと実感するような国際交流をして、自分の学校に戻ってきたときに、その経験がどういう学びとなって子どもたちとのコミュニケーションに良い影響をもたらすか。例えば慣れ親しんだ学校文化や教師文化が外から見れば当たり前のもではなく、ある特定の理解の枠組みの中で行っているものだと気づく。自分の教育観・子ども観の中で子どもを理解していると思っているかぎり、自分の理解の枠組みの外に出ていないから、実は子どもと「出会って」いないことになる。

子どもを理解できたと思った途端に、その理解は自分の理解の枠組みの中で子どもを「分かったつもり」になっているだけ。それが、進藤さんがカテゴライズせずに…と言ったところだと思うんだよね。自分のカテゴリーの外にいる異文化の子どもに出会ったとき、自分の理解の枠組みが揺さぶられる。この子のことを理解したと思っていたけれど、本当は理解していなかった、と思えた瞬間にだけ、生身のその子が立ち現われる。理解していると思っているかぎりは“全体としての子ども”は現れず、自分が理解している部分の寄せ集めとしての子どもが見えているだけ。自分の理解の枠組みを通して子どもを理解できると思わず、「理解しようとしながら、そのために対話し続ける」という姿勢を異文化交流で学ぶと、それが日々の教室の中で、異文化としての子どもと向き合うときに活かされる。日頃自分がどれだけできているかと言われたら難しいけれど、それを意識するきっかけは、異文化の他者との出会いだった。

II 変容とはしんどい状況

伊藤：吉田先生の「出会い」と「対話」というお話から思い起こされるのが、日本とアジアの関係です。アジア圏には共通点がたくさんあるけれど、一方で何を理解し合えていないのかを分かり合えておらず、歴史的経緯や認識のずれを背景にボタンの掛け違いが続いています。相互理解には、自国の多様な側面を知る努力をしつつ、近隣国と根気強く対話することが欠かせません。ACCUの事業においても「出会って対話する」ことが重要で、そうしないことには歩み寄っていけないのだろうと痛感しています。教職員国際交流事業ではそれを実現するための工夫が必要で、想像力・創造力がポイントになると思っています。

吉田先生：理解し合うために対話するのではなく、理解していないことを知るために対話するのですよね。国際交流は、心地良くない、痛い経験になる覚悟が要る。簡単に理解できないことを思い知り、言葉を失うような体験をする。

交流し、帰国後には、これまでの自分の理解の枠組みが揺さぶられ、今まで通りにいかなくなる、これが変容だよね。ただ

し「AからBへの変容」とは言わないほうがいい。Aが揺らいで何かに向けて変わり始め、Bへの着地点がないまま宙ぶりの状態で帰ってくる、これで、交流は成功したと言える。必要なのは、答えを持つ力より、その手前の宙ぶり状態に耐える力。もちろんそれが一番しんどいし、誰しも手短

な答えに着地したいよね。帰ってきたらやっぱり日本の価値観に着地しちゃうということがよくあるけれど、宙ぶりになったままAとBの間でどれだけ耐えられるかが大切。答えを持ってしまったら、その答えで閉じられるけど、答えを探して問い続ける間は開かれている。そういう状態にあることが変容だと思う。文部科学省の学習指導要領に「ものの見方・考え方が変わる」「主体的・対話的で深い学び」といった表記があるけど、この「深い」というのは、繰り返し言っている「自分の理解・認知の枠組み」をメタレベルから問い直す「メタ認知」によって学ぶことで、そこから自己変容が生じる学びになると思う。



伊藤

II face-to-faceの二人称関係の意義

吉田先生：ここまで国際交流で異質な他者に出会う意義について触れましたが、「現地で顔を合わせて対面する意義」も話しておきたい。ACCUが国際交流で、現地の人と一対一で向き合うことで、他ではできない何をしようとしているのか、これはとても大事だと思う。対面で顔を見ながら交流し、固有名詞で呼びかけ合うことの価値は、体験した人には分かるが、それをどこまで言語化できているか？それをユネスコ的に言うとうなるか。何日も皆で寝泊まりすることで、何を得られるんだろう？伊藤さんも日本の先生を引率していたと思うけど、1週間くらい一緒に泊まるのかな。

伊藤：教職員国際交流事業で1週間一緒に泊まるのは同じ国の先生が多く、そこにカウンターパートの行政官等が1～2名入ります。長時間共に過ごすのが同じ国の先生同士という点で、先生方はご自身の教育実践を比較、相対化して見る機会が多いかもしれません。

吉田先生：『我と汝・対話』という主著を持つマルティン・ブーバーという哲学者がいる。「我と汝」「わたしとあなた」。「あなた」と二人称で呼びかけられるのは今日の前にいる人しかいない。その人が他のところに行けば“彼・彼女”という三人称になる。目の前にいてあなたと呼びかけている関係は、その他の三人称的な関わり方とはまったく違うクオリティを持ち、根

本的に違うんだということをもっと意識しないとイケない。これが、ブーバーが強調したこと。レヴィナスという哲学者は、理解し得ない異質な他者論を強調した人で、戦争や虐殺は「顔と顔が向き合わなくなったときに起こる」と言った。相手の顔や目を見ながらその人を殺めるとき、空爆のように人間を三人称化・物象化してから抹消するときでは決定的な違いがある。face-to-faceの関係がなくなったときに戦争は起こるから、それに対抗するにはもう一度face-to-faceを構築するしかない、と。ユネスコも、国際交流は人と人が出会い対話するところから始め、国家と国家ではなく民間の一人と一人が出会っていくところから平和の砦を築いていこうと謳っているが、僕はそのface-to-face関係の重さを認識しているところがユネスコのすごいところだと思っています。

文化の根底にある普遍に触れる

進藤：我・汝のprimary（第一義的）な存在、face-to-faceで対峙する交流を国際機関であるユネスコが、あるいは文科省が国策として大切にしているというのはある意味すごいことだと思います。

ところで、吉田先生とお話すると必ず「文化」という言葉が出てきますが、吉田先生が「文化」を大きな軸として持っている理由、先生が大切になさっていることなどをお聞かせください。

吉田先生：国際交流の文脈で言うと、ユネスコ憲章の、心の中に築く「平和の砦」って、どんなものだと思う？これを考えると、やっぱり「文化」の持つ潜在力に行き着く。文化は、自国の人同士、共同体をつなぐ力を持っている。その力は両義的。共同体の外に対して排他的になり得る一方で、例えば以前ACCUと実施した環太平洋地域の多様な先住民の文化、歌・踊りを交えた対話をするシンポジウムで、それぞれの文化が洗練してきたエッセンスに触れて、共同体を超えた普遍性を持つ心のつながりが生まれることを体感できた。他国の文化に違和感を覚えることもあるかもしれないけれど、「本物の文化」には「心の対立の砦」が解けてつながれるような力があると思う。それはコスモポリタンで一元的な文化をつくるということではなく、各文化を研ぎ澄まし、一番純粹なところまで掘り下げ、それをシェアし、intersectionalな文化



進藤

交流をすることで、よりメタレベルの普遍性を持った文化が立ち現れてくる。それを目指すことで平和の砦、つまり「平和の文化（Culture of Peace）」を築けるのではないか。ユネスコ憲章では「政治的・経済的取り決めのみならず、知的・精神的連帯の上に築かれなければならない」とあるように、異文化間の交流の意味も、個々の文化の多様性の根底にある普遍性に触れて、それを共有して連帯するところにあるのではないか。

伊藤：今まさに先生がおっしゃったことがACCUとしての存在意義にもつながる気がします。先生の御著書の中でも取り上げられていますが、ユネスコは“文化的・精神的”という第三の領域を示し、この領域で自立的に活動することを示しています。そういうユネスコの理念を掲げているACCUとして、吉田先生がおっしゃった「他ではできない何をしようとしているのか」というACCUとしての価値、そして「対面関係が持つオリティは他とは違う」ことを意識していかなければならないと思います。

「変容」のところで、“宙づり状態”のお話がありましたが、先生が御著書で、ガンジーの「世界に変化を見ることを望んでいるなら、あなたがその変化になりなさい」という言葉を踏まえ、「世界を全体として変えるよりも、自分たちが今ここで小さな変化を創り、それを実際に生きることで世界が変わっていくことをめざしている」と述べていらっしゃいます。進藤部長からも「対話から生まれる気づきと変容」という話題がありました。ACCUの教職員国際交流事業は、発信力や影響力を持つ「先生」を対象に実施していますが、吉田先生の「先生たちが小さな変化を起こしていく」というところにつながっていくお話も、別の機会に伺えたら嬉しいです。

吉田先生：そうだね。今日話したことを教職員国際交流の文脈に落とし込んだら、先生たちが一人と一人として出会い対話していくこと、自分の中の枠組みから「出て、会う」体験をすることで生まれる変容が、それぞれの国に帰っても「問い」として生きてくと思う。学校に帰ってからどんな変容があるかという話題で出た“自らの教師文化の問い直し”や、“異文化としての子ども”といった捉え方もできるようになるんじゃないかな。

（対談実施：2022年9月9日）

＜参考文献＞

- 『世界が変わる学び ホリスティック/シュタイナー/オルタナティブ』吉田敦彦著、ミネルヴァ書房
- 『教育のオルタナティブ <ホティック教育/ケア> 研究のために』吉田敦彦著、せせらぎ出版
- 『我と汝・対話』マルティン・ブーバー著 植田重雄訳、岩波文庫
- 『持続可能な教育と文化 深化する環太平洋のESD』日本ホリスティック教育協会 永田佳之・吉田敦彦、せせらぎ出版

第1回 ASPUnivNet 運営委員会

①6/17(金)②ACCU③オンライン④9名

『グローバルエデュケーションモニタリング
レポート 2021/22 教育における非政府
アクター』ローンチウェビナー

①6/30(木)②広島大学教育開発国際協力研究セン
ター、国際協力機構、ACCU、教育協力NGO ネット
ワーク③オンライン④約230名

ASPUnivNet 2021 年度評価検討会議・
2022 年度第 1 回連絡会議

①7/8(金)②ACCU③オンライン④46名

ASPnet アクションリサーチ事業
第2回国内ワークショップ

①7/15(金)、16(土)②ACCU③岡山市④12名

ユネスコ日韓教職員オンライン対話プログラム
—ポストコロナ時代、持続可能な未来のため
の児童生徒・教職員間の国境を越えたコラボ
レーション—

①7/16(土)～10/15(土)②韓国教育部、韓国ユネ
スコ国内委員会、文部科学省、ACCU③オンライン、
東京都④日本教職員17名、韓国教職員16名、児童・

生徒

「ESD の推進を担う学校及び教員のための
評価手法開発事業」学校 / 教員評価セミナー
2022—第 1 回研究会—

①8/4(木)②ACCU③オンライン④26名

アジア太平洋青少年相互理解推進プログラム
—BRIDGE Across Asia 国際協働学習事業—

①8/4(木)、5(金)、8(月)、9(火)、9/11(日)、17(土)
②ACCU③オンライン④40名(モンゴル、韓国、タイ、
インド、日本)

ユネスコ未来共創プラットフォーム事務局
第 1 回ワーキンググループ会合

①8/5(金)②ACCU③出版クラブビル、オンライン
④12名

世界遺産教室「もっと知りたい世界遺産」

①8/9(火)②ACCU 奈良③なら歴史芸術文化村 芸
術文化体験棟ホール④70名(近畿圏内の小中学生及
び教員)

ユネスコスクール定期レビュー研修会

①8/9(火)、10(水)、22(月)、23(火)②ACCU③オ
ンライン④各回70～90名程度(2022年度ユネスコ

スクール定期レビュー対象校215校、文部科学省、レ
ビューアドバイザー等)

集団研修「木造建造物の保存と修復」

①9/1(木)～30(金)②文化庁、ACCU 奈良、イクロム、
(独)国立文化財機構 東京文化財研究所・奈良文化
財研究所③オンライン④15名(全13か国)

ASPnet アクションリサーチ事業
第2回地域会合

①9/5(月)～8(木)②ユネスコ・バンコク事務所③東
京④約25名(タイ、ベトナム、日本)

タイ政府日本教職員招へいプログラム

①9/19(月)、20(火)、23(金)②タイ教育省、チュラ
ロンコン大学、文部科学省、ACCU③オンライン④日
本教職員15名

第 1 回ユネスコスクールオンライン
意見交換会

①9/27(火)②ACCU③オンライン④約20名

2022 年国際識字デーイベント
—すべての人に学びの場を—

①9/30(金)②ACCU, SVA, NFUAJ ③オンライン
④約45名

ACCU INFORMATION

ACCUの青で一体感!—交流事業Tシャツ完成—

ACCUの教職員国際交流事業は、日本と、韓国、中国、タイ、インドの
二国間の初等中等教職員を対象とし、未来を担う子どもたちの成長に影響
力を持つ教職員同士の交流を通して、互いの国の教育制度、教育事情及び
文化について相互理解を深め、教職員自身が変容していく端緒を開き、ひ
いては多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目的として
います。

一部を除いて主にオンラインで実施する今年度は、たとえ物理的な距離
があっても各国教職員がプログラムの際にこのTシャツを着ることで、同
じプログラムの参加者として一体感を感じてもらえるようにという想い
を込め、今年度の本事業への参加記念品として制作しました。Tシャツは
ACCUのカラーである青色系を基調とし、プログラム

に参加することによる影響がそれぞれの所属する学校
や地域に「波紋」のように広がっていくことをイメ
ージしたデザインとなっています。また、波紋の中には
「Think Globally, Act Locally (地球規模で考えて、足
元から行動する)」というメッセージが含まれています。

8月に実施した韓国との交流プログラムにおいては、
会場で日本の教職員がTシャツを着用して“ACCU”の
ポーズをとってくれました。今後も日本と4か国との
様々なテーマに焦点を当てたプログラムが続々と実施
される予定です。各プログラムにおいて参加者による
活発な交流が行われることが期待されます。

オンラインの画面でも
青色が鮮やかに映える
Tシャツです!



(写真左から)北九州市立菅生中学校の窪田隆宏 教諭、小川亮 教諭、星加浩平 講師